



ローマ字運動の

過去・現在・未来

高倉テル

-1-

おれほど長いあいだの問題であつたローマ字の綴り方が決定したとゆう事わ、ローマ字運動の上だけでなく、国語運動全体の上から云つても、一つのエホックであるに相違ない。だが、案わ、それわ、決して現在のローマ字論者たちが考へてゐるほど大きな意味のあるものでわない。なぜかと云うのに、32年間へがン式と日本式が争つたとゆう事わ、やつと今度それが政府の力で解決したとゆう事わ、ローマ字論者のありたがでこゝ突に大きな問題だが、一般大衆の生活とわ凡そ縁遠いものであるからだ。少くとも、一般大衆わ、ローマ字の綴り方の決定と自分たちの生活とどんな関係があるか、何の自覚も持っていない。

先ず第一に、今度の綴り方決定に、大衆を全然関係する所が無かつたとゆう案を、特別に重大に考へなければならぬ。従来のローマ字論者たちわ、綴り方の問題でハホン式・日本式の二派に別れて必死の斗争お続け、決定後の今でもまだ盛に混合戦お続けているが、しかし、この問題お大衆のありたに渡り渡らせ、大衆の實生活からの批判お受け、そのキソの上に決定すべきものだとゆう案に至つてわ、両派とも全く考へてお見なかつたらしい。だから、今度の固定ローマ字わ、云わは實驗室で作りあげた營養料理のよ一息もので、それが果して適當な營養食であるかど一かの決定わ、これから實際にそれお大衆に食わして見て、その結果の調査と、それおキソとする更に新しい実験とに依らなければ出来ぬ事だ。

-2-

事實、これまでローマ字運動の指導者たちが、ローマ字お直接生活上の重大問題として全大衆の関心に訴へ、その下からの大衆運動によつてのみ最後の目的が達せられるのだとゆう案に、若ど何の考へも私わなかつたとゆう事わ、むしろ一つのプロシギと云わなければならぬ。

現在、政府わ国民全体に義務教育の名のもとに漢字カナまじり文お強制的に教へてゐる。漢字の一線一カクお聞遠えても、又、yōnaと発音する「やうな」

お「ような」と書いても「よーな」と書いても、すぐに国語上の誤として訂正される。「馬」お「んま」と書き、「私」お「私わ」と書けば、それこそトラツクでない誤として大変な非難お受ける。そ一書かなければならない根柢の理由に至ってわ、おこにも示されて居らず、誰にも余らな^がり付^けれどえ、^ん、とにかくそ一ゆう方針のもとに現在のすべての印刷物が刊行されて居る。

だから、このカナまじり文とゆう書き方がいかに不合理なものであり、社会の正しい発達お妨害するものであるかとゆう事突わ、決して広く大衆のあいだに知られて居ない、期々に大衆お政府の手で行われる教育に対して大きな信頼お抱いており、実際にカナまじり文の不使お痛感する場合にすら、その原因お多くお自分たちの無学に就いて、無学お違い取りさえすれば自然とそ一ゆう不便お消滅するものであるかのように、漫然と感じて居る。第一に、ここにローマ字お大衆の問題とする為の非常に大きな困難が横たわっている。

第二の困難お、ローマ字お使うことによつて大衆は現在その生活の上に直接なんの利益も得ないとゆう事にある。現在、大衆おローマ字に関して何の知識も持っていない、したがって、ローマ字お知るために既に新しい一つのフタが有る、しかも、それに依つて受ける實際上の利益お何にもない。この上に、ローマ字の運動にお、カナマシ運動や国語愛護同盟の運動や漢字節約の運動よりも、遂かに大きな困難が横たわっている。

これらの大きな直接の困難お克服するにわと一すれば好いかとゆう問題が解決される筈なく、それでローマ字運動の目的が達せられぬと考へたら、それわあまりにもノキな話だ。それわ、ローマ字の問題お永久に単に外交文書や駅名の標示や海図の問題にのみ止めるものに外ならない。

— 3 —

こ一ゆう大衆の立場の無視わ、当然その指導理論の甚しい浅さと低さとなつて現れて居る。

これまで、ローマ字論者たちの論争にお、言葉と文字の関係について、古い言語学の初歩すら知らないと思われる、甚しい無学ぶりお至る所に現れていた。文字わ「言葉」お現すものであり、「音」お示すフォネティック・サインとわ遠うえのだとゆう、分りきった事さえ、至る所で混乱した。ハホン式が fu お、日本式が di, du お同様の標記の象徴え、結局おそこから来たものだ。殊に驚くべきわ、言葉が「社会現象」であるとゆう事に重大な事実すら知らなかった事だ。

日本式最高の指導者であった田丸卓郎は、日本人が日本語お使うのわ「自然現象」だから、自然現象としてその法則を窺見しなければならぬと、明かに云っている。これに対してヘボン式から又何の反対もなかったのだから、ローマ字論者全部が同意見だったと思なされる。これせわ、言葉の変化発達とその方向に対して何の理解も持つことができません、それおキノ綴り方に対する確固たる方針お確立することができないの^も当然の事だから、fu か hu か、di か zi かで、大衆おソツチ除けにして何十年も^論争お続けていたの^も、誠に無理がないと云える。

云うまでもなく、言葉わ同じ一つの単語でも、音韻的に、意義的に、時代により、地方により、個人によって、それおれ違っている。それお一つの文字で書き現すためにわ、そこに統一がいは。これまでその統一が無意識に行われていたが、今や我々それお意識的に行わなければならぬ場合に立ち至っている。そこに実に重大な意味があるのだ。つまり、統一にわ方針が必要だ。そして、その方針わ、言葉の発達とその方向お正しく見ざわめる事によってのみ生れて来る。その為には、言葉の社会現象としての本質お正しく理解し、その発達^の経過と方向の中に社会の意志が根本の動機となつていかに依っているかとゆう事案わ、何よりも重大に汲み取らなければならぬ。

言葉わ生産のキノお成す重大な要素として、常に発展して止む時がない。したがって、その発展のうちには、常に社会の意志が最大の動機として籠っている。だが、社会が支配者と被支配者の二つの階級に分裂し、二つの階級の意志が敵対の關係に置かれる時、二つの階級の意志お激しく斗争し、一つの階級の意志が他の階級の意志お圧迫する。そこで、多くの場合、生産者大衆の意志お言葉の発達から除外され、言葉わ一時的に発展お止め、退化する。だが、こ^のやう矛盾わ、やがて厭やで克服せられざるお得ない時が来て、今度は或る^もまで大衆の意志が支配者の意志お圧迫する。そこで、曲りなりに言葉わ又^もや発達^の正しい軌道に歸つて来る。

例えば、助詞の wa が、かつて pfa であり、次に fa となり、更に ha となり、現在 wa となっており、更に子音 w が落ちて單に a となつて^いる変化の中にも、di, du, kwa, wi, we その他の音が殆ど現在の日本語から消えよ^としている事實のなかに、又、これらの変化発達と或る離れ^に或る^も近づいて来たその書き現し方のなかに、この二つの敵対する階級の意志が互に圧迫^しあ^いか^らみ合^つて来た現象お正しく汲み取らなければならぬ。そして、その中から日本語とその書き現し方の正しい方針お見出さなければならぬ。

在来のローマ字運動にわ、理論的に、したがって実践的に、こーやう根本的のキソが欠けていた。いつまで立っても、遂に天下り的の形体から抜け出すことが出来なかつたのわ、実にこれが為であった。

ローマ字の指導者たちわ、これまで、カナモジ会の運動とえ、漢字制限の運動とえ、殆ど結びついた争が無く、多くの場合、反ってこれらと対立していた。カナモジ運動と、漢字制限の運動と、又エスペラントの運動と、現在の国語・国字に対する或る否定から出発する處で、共通の土のお持っている。結局、これらの運動わ、国語・国字改革のある段階的形式に外ならない。少くとも、ローマ字運動が大家の立場に立ち、現在の国語・国字がいかにも不合理なものでありやばいものであるかという争が大家のあいだに深く浸透させるためにわ、これらの運動と結びつき、これらお利用し、或る處でこれらの形お借りなければならぬ。ローマ字運動が最後の目的お達する為には、断じて大家運動に依りなければならぬし、これお大家運動えらしめるにわ、何よりも先ず現在の国語・国字の本質お大家にバクロする争から出発しなければならぬからた。

ところが、現在ローマ字の指導者たちわ、カナモジ会の発音式カナ使いえれとより、文部省の国語審議会決定のカナ使いにすら進む争がでなないで、依然と古くさい歴史のカナ使いによって平気で彼等の文章お書いている。‘私は’と書く事から‘私わ’と書く事にまでさ文前進し得ない者が一足とびに‘watasi wa’に達めと大家に号令する争がいかにも不合理であり不可能であるかという争が実際にさえ気がつかぬほどウカツであり、天くだり的だつたのだ。大家に‘watasi wa’と書くことの正しさお知らせよーと思うならば、先本‘私は’と書くことの不合理お大家にバクロし、これおハカイする争から始めるより外に絶対に途がないという争にさえ気がつかない、その直接の原因わ、日本語の發達とその方向に対する無智から来るものだが、本質的にわ、大家の立場に立と一としなかつた運動のゴツケイな非実践の現れに外ならない。

だが、現在、在来のヤバな国語・国字に対する大家の無意識な反抗・否定わ、少し注意して見るならば、実に在るやうの場面にこれお発見する争ができる。そこには、ローマ字えの大きな道が待ちかまえている。今すぐ要求されるのわ、ローマ字運動えの大家の立場からの新しいキソ理論、したがって実践のための確固たる方針、ただその一つがあるのみだ。